

修士学位請求論文要旨

オスカー・ワイルドのホモセクシュアリティの日本における受容

—— 谷崎潤一郎を中心に ——

国際日本学研究科 国際日本学専攻 文化思想研究領域

4911236001

佐野日菜子

本論文は、日本におけるオスカー・ワイルド流行期にあたる明治後期から大正期におけるワイルドの受容を詳細に調査することを通して、当時の日本においてワイルドのホモセクシュアルなエピソードが認知されていたこと、また、ワイルドの作品がホモセクシュアリティを描いたものとして解釈されていたことを明らかにするものである。また、そのことを踏まえれば、ワイルドの影響を受けた日本の作家がホモセクシュアルなモチーフを扱うことが「芸術」的であるという発想を持ちえたことになる。本稿ではワイルドの強い影響下に作家活動を開始した谷崎潤一郎を例にとって、ホモセクシュアルなモチーフを扱う多くの小説の存在を指摘し、ワイルド受容との関連について論じる。

ワイルドが活躍した時期のイギリスでは、男性間のエロティックな行為は、一八八五年に改正された刑法第一一条によって懲役に処せされることになっていた。ワイルドは多数の男性とホモセクシュアルな関係を結び、その中の一人であったアルフレッド・ダグラスの親族に訴えられ、敗訴し、投獄されたということが広く知られており、現在ではワイルドとホモセクシュアリティは結びつけて捉えられることが多い。

しかし、日本にワイルドが紹介され始めた当初は、ワイルドと言えば、第一に「サロメ」の作者であった。また、一九一一年に「獄中記」が翻訳され、一九一三年に「ドリアン・グレイの肖像」も「遊蕩児」として翻訳されるなど、作品が読まれ、話題になったということが、ワイルド受容についての先行研究で専ら注目されてきたことであった。右に述べたようなワイルドのホモセクシュアルなスキャンダルについては、イギリスでも直接的な表現が憚られていたこともあり、日本では早い時期には知られてい

なかったと見なされるか、または知られるようになった時期について曖昧に語られてきた。例えば、佐々木隆の「書誌から見た日本オスカー・ワイルド受容研究」は、ワイルドのホモセクシュアリティが日本で認知されるようになった時期について触れている数少ない研究の一つだが、佐々木は、ワイルドが「同性愛者」として注目されるようになるのは、日本で「変態性欲」言説が定着した一九一九年、一九二〇年頃以降であり、それ以前は注目されなかったと捉えている。

そこで、ワイルド受容が本格的に始まった一九〇七年から一九一八年頃までのワイルド受容に関する文献を調査した。その結果、一九〇七年に「サロメ」を日本に紹介した記事として重要視されていた森鷗外の記事に既に「男色」に関する記述が存在しているということが分かった。その後もワイルドの「男色」はたびたび言及されており、その知識が広く共有されたものであることを述べる記事も散見される。また、ワイルド本人の「男色」について知られているというだけでなく、「ドリアン・グレイの肖像」や「サロメ」などワイルドの作品をホモセクシュアリティを表現したものと解釈する例もあつたことが判明した。日本でワイルドのホモセクシュアルなイメージは日本で「変態性欲」言説が定着する前に広く知れ渡っていたのである。

ワイルドという作家を受容するにあたってホモセクシュアルなイメージを認知していたことを踏まえれば、ワイルドの影響を受けた日本の作家の小説においてホモセクシュアリティを表現する試みがなされなかったのかどうかという点の検証が必要となる。そこで、次にワイルドの影響を受けた最も代表的な作家である谷崎潤一郎の、特にワイルドの影

響が強かった初期の作品に焦点を当てて、前述の知見を踏まえて検討を試みた。

これまでの研究でも、谷崎作品は「同性愛」的な視点から捉えられることはあった。だが、そのどれもが谷崎の幼少期の体験から来るものだというもの、もしくは谷崎作品の多様なセクシュアリティのうちのひとつという位置づけにとどめるものであり、ワイルドの影響で谷崎がホモセクシユアルなモチーフを自身の作品に取り入れているという指摘は管見の限り存在しない。しかし、谷崎の作品をホモセクシユアルという視点から読み直したとき、男性が男性に魅力や美を感じる作品は多く指摘できる。

例えば、「少年」(『スバル』一九一一年六月)には、男性である「私」が美少年・信一にいじめられ、「いつの間にか心も体も全く信一の傀儡となるのを喜ぶやうになる」場面がある。

「憎念」(『薔』一九一四年三月)では、男性である「私」が丁稚の安太郎の鼻の穴の醜さを憎らしく思い続け、最終的には「私の彼に対する感情は、彼の肉体から受ける官能的の刺激に依つて支配される」。

ワイルドの影響が最も多く指摘されている作品である「饒太郎」(『中央公論』一九一四年九月)には、「ドリアン・グレイの肖像」の主人公・ドリアン・グレイに対応する人物である庄司、そのグレイを悪の道に導くヘンリー卿とグレイを描く画家バジルの役回りを兼ねた人物である饒太郎が登場し、饒太郎が「美貌」の青年である庄司の足が見たいと思い足袋を脱がせ、「心を惹きつけ」られる場面がある。

また、「少年の脅迫」(『東京日日新聞』『大阪朝日新聞』一九一八年二

月九日～一九日)もワイルドの影響が指摘される作品であるが、ここにも美少年が登場し、「私」がこの少年のことを「心底から好きになる」。そして、この美少年を含む少年たちに「私」は「惨らしい、穢らしい、浅ましい役目を負はせられ」、そのことを「報酬」と表現している。

「嘆きの門」(『中央公論』一九一八年九月～十一月)では、作家である「主人」が美少年を養おうとし、美少年もまた「主人」の風呂上がりの姿を想像し、「不思議に芳烈な誘惑の色を帯びて居るやうに感じる」。本作はこれまでワイルドの影響を指摘されてこなかったが、作家である「主人」が美少年を誘惑するという構図はワイルドとアルフレッド・ダグラスの関係をモデルにしていると思われる。

他にも、「象」(『新思潮』一九一〇年一〇月)、「刺青」(『新思潮』一九一〇年一二月)、「麒麟」(『新思潮』一九一〇年一二月)、「幫間」(『スバル』一九一一年九月)、「秘密」(『中央公論』一九一一年一二月)、「颯風」(『三田文学』一九一一年一〇月)、「金色の死」(『東京朝日新聞』一九一四年一二月四日～一七日)、「美男」(『新潮』一九一六年九月)、「人魚の嘆き」(『中央公論』一九一七年一月)、「魔術師」(『新小説』一九一七年一月)、「二人の稚児」(『中央公論』一九一八年四月)、「或る漂泊者の倅」(『新小説』一九一九年九月)、「青い花」(『改造』一九二二年三月)、「AとBの話」(『改造』一九二二年八月)など、谷崎潤一郎の数多くの作品において男性が男性に惹かれる構図や男性の美というモチーフが表現されている。

このように、谷崎はワイルドに関連する作品でホモセクシユアルなモチーフ、あるいは男性が男性に魅力や美を感じるモチーフをたびたび扱

ってきた。谷崎がワイルドに傾倒し、特に初期作品や私生活においてワイルドを模倣していたことやワイルドの「男色」が書かれた文献にアンダーラインを引いて熱心に読んでいたという同時代の証言を踏まえると、谷崎はワイルドの芸術を模倣しようとする上でホモセクシュアルなモチーフを作品に取り入れることを試みていたと考えられるのではないだろうか。

ワイルドの影響が日本で強かった時代にホモセクシュアルなモチーフを描いた作家は谷崎だけではない。今後はワイルドのホモセクシュアリティの他の作家への影響も視野に入れて検討を進めて行きたい。